



喜劇王・渋谷天外③ 三善貞司 執筆監修

大御所を唸らせた一雄の脚本

天外・十吾のコンビで主役を演ずる

大正9年(1920)14歳になった孤児渋谷一雄は、大阪道頓堀の芝居茶屋「岡島」に住み込み丁稚として働きますが、生来文筆を好み、あるとき「私は時計であります」と題したけつたいな脚本を書き、店の主人に見せます。「ほんまにお前が書いたんか?」、芝居好きな主人は感心し、知りあいの喜劇役者の大御所曾我廼家十郎に、「うちの子がこんな書きよった」と渡します。

十郎はべらべらとめくって目をむき、「ほほーっ」とため息をついて、「よろしま。うちで上演しましょう。ま、貸しなはれ」と持っていきましました。

「芝居見にいったら、三分の二は書き直されていましました」
のちにこう一雄は語っていますが、これが喜劇王二代渋谷天外の最初の脚本です。今なら中学2年生の作品を、有名な曾我廼家一座が舞台にのせたのですから、これは大した才能です。

2年後の大正11年、一雄は脚本家として「志賀廼家淡海一座」に雇われました。この一座は一雄の父初代渋谷天外や中島楽翁が亡くなって「楽天会」が解散したあと、楽天会を後援していた興行会社松竹の世話で結成された喜劇一座です。

淡海が「なに? 天外のぼんがホンを書くのか。うちとこにおいで」と、親切にひっぱってくれたのです。

淡海一座の役者たちは、小学校にもろくに通わなかった一雄をバカにして、ふきそうじや道具運びなど雑用ばかりをやらせます。一雄は黙々とこなし、用事をかたづけると隅っこに座って鉛筆を削り、奇想天外な脚本を書いて淡海を唸らせました。

「おい、渋谷のぼんに、そんな仕事させるな。こいつ大変な才能がある。好きなだけホンを書かせてやれ」

と、ことごとくに一雄をひいきしますから、仲間には面白いはずはない。そのうちに一雄は袋だたきにあいました。

この時代は女優はいない。芝居では女形が勤めるのが常識です。淡海一座も男ばかりで、女役は石山秋月、石山式部などの女形役者がひきつけています。彼らは芸達者ですが悪ぶざけも過ぎます。

「師匠、浅草では女優者を起用して成功しています。女形では時代にとり残されます」

文芸的な香りもただよう本格的喜劇をめざしていた一雄が、何度も淡海に進言したのを

秋月や式部が知ったのです。

「あのガキ、わいらの生活権を奪うつもりや」

「あいつのホン、わいらの出番少ないやないか。おい、痛い目にあわせたるや」

と寄つてたかつて殴られ蹴られ、血まみれになった一雄は、淡海一座から姿を消してしまいました。

大正14年（1925）曾我廼家十郎が死亡します。いかにも大阪人らしい人情味豊かな芸風を惜しんだ松竹の社長白井松次郎は、昭和3年（1928）十郎の弟子で多額の借金をかかえていた曾我廼家十吾に目をつけ、「お前の芸は師匠そっくりや。十郎劇を復活させへんか」と彼を座長に、「松竹家庭劇」を結成します。さらにくすぶっていた一雄をさがしだし、座付作家にしてくれました。

一雄は水を得た魚のように元気になり、志賀里人、たてなおし館直志と内容によって筆名を分け、脚本を書きまくりますが、翌4年には二代渋谷天外を襲名して役者としても舞台に上がり、ハードスケジュールもいいところ、めちゃくちやに働きました。天外・十吾の名コンビの誕生はこれからです。ときに十吾は37歳、天外はまだ22歳の若者でした。

「新しいお笑いホームドラマ」をめざした松竹家庭劇は、昼夜2回興行、合計新作10本が目標で、十吾も茂林寺文福の筆名でホンを書きます。しかも二人はたがいに舞台では主役を勤め、絶妙なコンビで客席を沸かせますからその多忙なこと、あのお二人、いつ寝とるんやろと座員までうわさするありさまとなりました。

昭和の初めは軍が政治を支配し、隣国に侵入する右傾化の政策が強行され、社会不安が増幅ぞうかくされていった時代です。世相が暗くなればなるほど、民衆は息抜きの笑いを求めます。松竹家庭劇の人気は、こんな背景に支えられたものです。

しかし数年後、天外と十吾の間にすきま風が吹き始めました。きっかけは東京公演です。もともと自信のある芝居をもっていたのですが反響は今ひとつ、客席は妙に白けていました。

「そらな、東京では大阪弁が通用せえへんからや」

十吾は軽く流しましたが、天外は松竹家庭劇は地方区に過ぎないのではないかと悩みだしたのです。つまりおおげさにいえば、文化の質の問題です。

「単なる言葉の違いやない。笑いの質が低いんや。わしらの芝居は低俗すぎる」

天外はふさぎこんで悩みます。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞